

この道をどこまでも

主任司祭 吉池好高

記録的な猛暑と、度重なる災害に見舞われた平成最後の夏でしたが、今なお復興に向けての困難な途上にある被災地の方々に心を向け、出来る限りの支援に力を合わせてまいりましょう。出来る限りということは、わたしたちにはこれだけしか出来ないということではなく、わたしたちにもまだまだ出来ることがあるはずだということです。そのような心を奮い立たせて、被災地の方々に寄り添ってまいりましょう。このような心をもって生きるということは、わたしたちのそれぞれの人生にとっても大切なことです。自分にはもうこれしかできないということは、自分にもまだこれならできるという余地が残されているということであるはずです。そのような前向きの姿勢を保って生きるために、十字架の主へ心を向けましょう。

あの十字架の上で、手足を釘づけにされた主はもはや何も出来にならないように思えます。「さあ、その十字架から降りてみろ。そうしたら信じてやる。」人々はこのようにはやし立てたのです。しかし、十字架上の主に対する人々のこの嘲弄は的外れのものであったことをわたしたちは知っています。わたしたちが信じている、神の子、わたしたちの主イエス・キリストはこのようにして、父なる神から託された使命を全うされたのです。その主は、今もあの十字架の上から「わたしに従いなさい」と呼びかけておられます。十字架の死に至るご生涯を父なる神のお望みと受け止め、歩み通された主がわたしたちにもその道に従うことを求めておられるのです。十字架の死によってわたしたちにそのいのちを与え尽してくださった主を信じ、その主を愛するとは、わたしに従いなさいとの十字架の主の呼びかけに従うということです。そのような信仰に立つことができれば、「自分にはもう何も出来ない、自分にできることはもう何も無い」とは言えないはずです。

十字架の主に従うわたしたちの信仰の道は、どこまで行っても、幾つになっても、主ともに、主に従って歩む道です。もう何もできないと言ってはならないのです。むしろ、十字架の主に従うわたしたちの道は、わたしたちの行く手に広がっているのです。